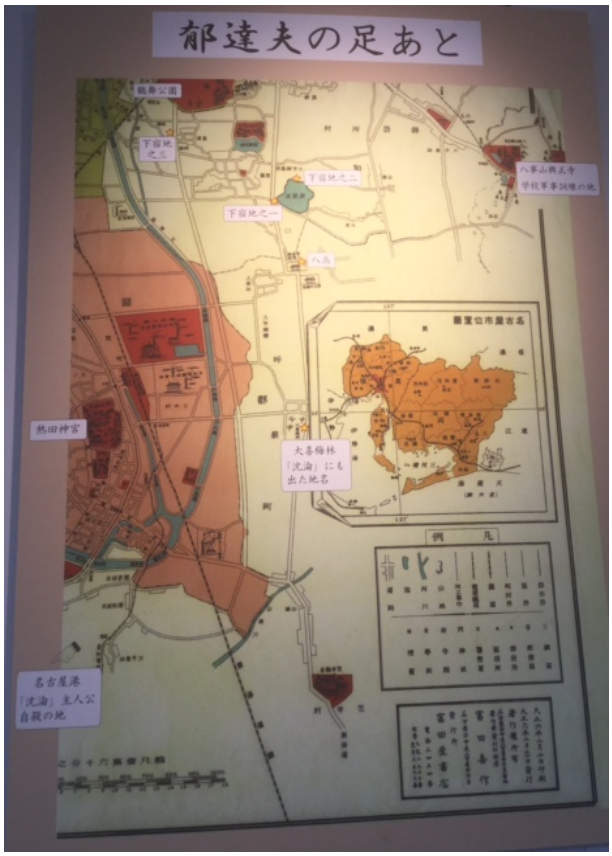
郁達夫と旧制八高

郁達夫「八高入学百周年記念展」のなかでも、とりわけ次の 2 枚の写真に注目した。上は郁達夫が八高に通っていた頃の八高正門あたりである。八高の写真はいくつか見たが、これは初めてだ。八高の前を「郡道」が走り、その外側には田畑が広がっていた。

下の写真は「郁達夫の足あと」と題した、当時の地図である。郁達夫は名古屋を舞台にした自伝小説『沈淪』を 1922 年に刊行した。ここにも出てくる鶴舞公園や熱田神宮、興正寺などが表示してあり、彼の「足あと」をたどることができる。



地図の中ほど上に、八高も見える。「郡道」も北から南へと真っすぐ伸びており、八高のところで折れ曲がっているのが分かる。郁達夫の下宿先が 3 箇所ある。第一と第二の下宿先は、「廣見池」とあるから、現在の名古屋市立向陽高校あたりだ。ここは現役の頃によく歩いた。

「郡道」を南に下がり、瑞穂区下坂町（レポートでも紹介している鍼灸院近く）近くに「大喜梅林」とあり、『沈淪』にも出た地名と書かれている。朝日新聞 1971 年 9 月 18 日号に「郁達夫と名古屋・大喜の梅林」として紹介してある。

市電堀田線の牛巻電停から東、大喜町１丁目あたりの丘陵にあった梅林である。沈淪の中で、この梅林を「両側の絶壁を通り抜け左手の斜面を見ると、その丘の上には姫垣があって---- その絶壁を背にして二階家が一軒に平屋が数軒並んでゐた。窓が全部閉まっているところから見ると、梅の咲く時分酒や食物を売るためのものらしい。二階家の前は芝生。--- その芝生の南はずれ、丘の頂きの平地から南にだらだらと下って行こうとする所に石碑が一基立って、この梅林の由来が記されてあった」と描いている。

作品によれば、この直後、彼はこの梅林の中の一軒家を借りて、ここから八高へ通っていたようである。

（2015 年 10 月 20 日）